

グローバル時代の幼児教育に求められる教材・教具 －文化多様性に親しむ実物教材に着目して－

The Teaching Materials required for
early Childhood Education in an Era of Globalization

-Focusing on Hands-on Materials promoting Cultural Diversity-

福山文子^{*1}・田尻信壹^{*2}

Ayako FUKUYAMA, Shinichi TAJIRI

1. はじめに

グローバル化に伴い、外国にツールをもつ子どもたちが日本の保育機関などに多数在籍する状況¹⁾になっている。幼児の国際化に関する調査報告書(平成20年度)によれば、51自治体の保育所における外国人児童数は13,337人であり、国籍別にみるともっとも多いのはブラジル国籍である²⁾。そのような状況の中で、外国にルーツをもつ子どもたちは文化的な適応の課題を抱え、日本人の子どもたちは異なる文化といたに生きていくかという課題に取り組む必要が出てきており、日本においても異文化への対応にかかわる教育的支援を、乳幼児期という人間形成の早い時期からはじめることの重要性が指摘されている³⁾。実際に、「日本に来る外国人の親にとって日本は生活基盤を形成する場だが、子どもたちにとってはアイデンティティを喪失する場でもある」、「外国、特にアジア出身の子どもは偏見を持たれ、差別され、日本にいるうちに自尊心を傷つけられることも少なくない」⁴⁾との指摘があり、身近に共生にかかわる問題が出てきている。また、既にアメリカでは、「子どもたちは、肌の色、髪の毛の特徴などの

違いに生後一年目で注目しはじめる」、「3～4歳までに、自分とは異なる肌の色、言葉などに対して不快や嫌悪や恐れを示し、皮膚の色、着ている服、言語能力ゆえにからかったり、一緒に遊ぶことを拒否したりする」ことが報告されており⁵⁾、このような報告も考えあわせると、日本における異文化への対応にかかわる教育的支援については、主に多数派である日本人の子どもたちに対して早い時期に行われることが重要であると考えられる。

このような保育の実践例として、アンチ・バイアス教育や、「きめつけ」をなくそうとするものなど、多様性を尊重したものが報告されている⁶⁾ものの、幼児期の異文化への対応にかかわる教材についての研究はほとんど行われていない。しかし「幼児教育者にとって重要なことは、狭義の意味での教材、すなわち準備し計画できる教材として、なるべく多様なものを用意し、子どもの体験・経験がより実り豊かなものとなるよう素材を提供するということ」⁷⁾であり、異文化への対応にかかわる教育的支援を行う上で、その課題に特化した教材の選定は重要なことであると考えられる。そこで本稿では、今日の幼児の異文化にかかわる実態を踏まえ、

*1 中央大学文学部兼任講師 *2 家政学部児童学科教授

かつ異文化への対応にかかわる教育的支援を可能とする教材・教具として、文化多様性に親しむ実物教材に着目し、5 歳児を対象とした具体的な指導計画（日案）について検討を行うこととする。

2. 先行研究の検討

ここでは、幼児教育と文化、幼児教育と教材・教具、および幼児と発達にかかわり、整理や先行研究の検討を行う。

(1) 幼児教育と文化

廿日出は、保育所における友人関係の分析を通し、これまで外国にルーツをもつ子どもたちにかかわる研究の多くが、言語習得と学習との関係や、外部的な教育環境の実態を明らかにすることに焦点が置かれてきたことに課題意識を持ち、子どもたちの相互作用のなかにこそ、相互作用を可能にする規範が存在すると論じている。併せて廿日出は、異なる文化的背景をもった者同士が親密な関係を築いていくには、偶発的に起こることがらをきっかけに保育所がそれを理解し、支援することが重要であると指摘している⁸⁾。また爾は、これまでの日本における幼児期の多文化教育の研究並びに実践が、外国にルーツをもつ子どもたちを受け入れ、日本の集団生活に慣れさせていくことの研究であり対策であったと指摘している。そして、次の流れとして、子ども同士の異文化相互理解を保育カリキュラムの中に取り入れていく必要があると論じ、文化性のある保育行事を用いることの有効性について論考している⁹⁾。また、松尾は、乳幼児を対象にする異文化間教育の研究は非常に少なく、異文化間教育の理念に根差した支援はほとんど行われていないと指摘したうえで、多文化に生きる子どもたちにどのような教育や支援をしていけばよいのかを追求する課題があると述べている¹⁰⁾。また、三井は、保育現場における外国籍の子どもと保育者のかかわりを分析・考察することを通し、「子どもの国籍や文

化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるよう配慮すること」という保育指針と現場との乖離について指摘している。そして、支配的な文化の見直しの必要性について指摘している¹¹⁾。管田は、幼児期が「偏見予備状態」であり、この時期から子どもが「違い」に対してマイナスの価値づけをしていないか、保育者が注意深く見守る必要性を指摘している。さらに、併せて幼児期こそ、自文化・異文化に対するプラスの価値付けが実践されなければならない時期であるとしている¹²⁾。平野は、ルイーズ・ダーマン・スパークスやブラッツフォードが差別や偏見という態度形成が幼児期であると論じていることに依りつつ、幼児期に「偏見」を育てないためには、外的環境を整えつつ内面に「偏見に打ち勝つ力」を育成する必要があると論じている¹³⁾。

これらのことから、幼児教育と文化にかかわる研究において、外国にルーツをもつ子どもたちを対象とした日本の環境への適応の課題から、マジョリティを対象とした、あるいはマジョリティを含むすべての子どもたちを対象とした異文化への対応にかかわる教育的支援へと課題や関心がシフトしていることが読み取れる。また、差別や偏見が幼児期に形成されることを踏まえて、適切な対応の必要性が指摘されているものの、具体的な教材の検討や提示はなされていないことがわかる。

(2) 幼児教育と教材・教具

教材とは、「大人と子ども、あるいは子どもと子どもがつくりだしている教育関係のなかに登場し、教育の媒介となるすべての文化財」¹⁴⁾、あるいは「教材とは、人間形成に役立つ力の総体としてのカリキュラムの材料を意味する」¹⁵⁾と言われる。また、教材とは一義的に定まった定義は得られていないとの前提の上で、「授業において指導すべき教育内容を学習者の学習課題として具体化した材料のことである」と、論じられることもある¹⁶⁾。さらに、文部省が小・中学校の教材・教具を計画的に整備するために

つくった「教材規準」では、黒板、楽器、木工用具、視聴覚機器までが教材と呼ばれていることから、「教具の概念を駆逐している」と指摘されるとともに、中身からみると「教具」という意味合いが強いと言われている¹⁷⁾。これらのことから、教材・教具の概念の大きさが理解できるとともに、教育や人間形成に欠かせない重要な要素であることがわかる。

本稿では、教材・教具が含み込む領域の広さを認識した上で、「教材・教具」という表記を用い、教育の媒介となるすべての文化財を含むこととする。また、幼児教育の捉え方については、広義では家庭や社会において行われるものも含まれるといわれるが¹⁸⁾、本稿では保育所や幼稚園といった保育機関における教育に限定して論じていく。幼児教育における教材・教具に関しても多様なものが存在し、呼称も園具、玩具、保育教材など多岐にわたるが、本稿では教材・教具の定義として大沢の「幼児に教育内容を習得させるための素材・教材」との論に依ることとする。

(3) 幼児と発達

乳幼児期は、心身の発育・発達が著しく、人格の基礎が形成される時期である。また、乳幼児期の発達の特性として、「人への信頼感が育つ」「環境への関わり」「子ども同士の関わり」「発達の個人差」「遊びを通して育つ」「生きる力の基礎を培う」の6点が挙げられ、保育士等は、子ども自身の力を十分に認め、一人一人の発達過程や心身の状態に応じた適切な援助及び環境構成を行うことが重要である、とされている¹⁹⁾。そして、子どもと共に過ごす保育士等は、子どもに安心感や安定感を与えながら、子どもの発達の特性や発達過程に沿った適切な援助をしていかなければならない。さらに、生活や遊びを共にする中で、子ども一人一人の心身の状態を把握し、子どもが自ら環境に働きかけ、感じたり考えたり試したり工夫したり繰り返したりする過程を見守り、子どもと共に環境を再構成し

ながら楽しんでいくことも大切であると、言われている。

また、子どもの発達過程は、「おおむね6か月未満」「おおむね6か月以上1歳3か月未満」「おおむね1歳3か月から2歳未満」「おおむね2歳」「おおむね3歳」「おおむね4歳」「おおむね5歳」「おおむね6歳」という、8つの区分としてとらえられる。そして、「おおむね4歳」では、子どもは友達や身近な人の気持ちを理解し、「おおむね5歳」では、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付け、相手の心や立場を気遣っていく感受性を持つ。さらに、「おおむね6歳」は、社会生活を営む上で大切な自主と協調の姿勢や態度を身に付けていく時期であり、こうした姿勢や態度が生涯にわたる人との関わりや生活の基礎となるといわれる。加えて、この時期においては、社会事象や自然事象などに対する認識も高まり、周囲の大人の言動についてもよく観察し、批判したり、意見を述べたりすることもあるとされる²⁰⁾。

つまり、おおむね5歳という時期において、既に幼児は、「身近な人の気持ちを理解」し、「異なる思いや考えを認め」「相手の心や立場を気遣っていく感受性を持つ」と考えられる。

3. 幼児の異文化をめぐる状況

異文化への対応にかかわる教育的支援を可能とする教材・教具を考えるにあたり、谷田・高橋の「幼児期の教材を考えるには、現代の幼児の実態を知っておくことがまずもって必要であろう。なぜなら幼児の実態把握をなくして教材の開発は考えられないからである」との指摘²¹⁾は重要であろう。そこで、本稿では、外国にルーツをもつ子どもたち自身の語り²²⁾に依りつつ、幼児の異文化をめぐる実態を把握していきたい。

本稿では、外国人児童・生徒の悩みを受けとめようという目的で²³⁾、全関西在日外国人教育

ネットワークが主催し、大阪府教育委員会などがかかわり実施されてきた事業である「ちがうことこそすばらしい！子ども作文コンクール」の作文集に掲載されている、外国にルーツをもつ子どもたちの語りに着目する。データソースとしての作文集などの文献の価値に関しては、メリアム (Sharan B. Merriam) が、質的研究において、文献 (当該研究に関連した、はば広い活字的・映像的・物的資料に言及するさいの包括的な用語) を、インタビュー、観察に次ぐ三番目の主要なデータソースであると述べている。そして、文献を、①公的記録、②私的文書、③物的資料、④調査者が作成した文献、に分類した上で、作文集がその中に含まれると考えられる私的文書について、きわめて主観的な資料であるが確かに当事者の観点を反映するものであり、またそれが質的調査の求めている情報である場合も多いと指摘している²⁴⁾。したがって、本研究で扱う作文集は、当事者の観点と一定の実現を反映するものとして分析対象となり得る資料であると考えられる。

掲載されている、主に小学生から高校生による、合計 104 編の作文について、内容に即し 6 つのカテゴリー (①被差別体験、②将来の夢・希望、③家族 (特に親) の置かれた過酷な状況、④支えとなった (なっている) こと、⑤学習面についての悩みや不安、⑥その他) に整理、分類した結果、104 編中 53 編と、半数以上の外国人児童・生徒が被差別状況について語っていた。例えば以下のようなものが挙げられる。

・何しろ日本語が分からない中で初めてかよった保育所なので、嫌な思いをしたことも多いでした (ママ)。今度の保育所も同じような感じだろうと思って通い始めてしばらくして、田ノ岡先生との出会いが私の気持ちや生活を一変させました。 - 中略 - ある日の自由時間、私が一人で砂山を作っていると、そこへ田ノ岡先生が来て、いろいろ声をかけてくれました。その時の私は暗い気持ちでした。

どんなことを話しかけられたか覚えていませんが、田ノ岡先生と話していると、自然に気持ちが明るくなり、とても楽しくなってきたのを覚えています。そして、毎日保育所に通うのが楽しみな気持ちに変わっていきました。(「自分らしく生きるということ～人との出会いから学んだこと～」：小学生、下線筆者)

また、幼児期にかかわる記述ではないが、低学年のものに下記のような記述がある。

・私は名前で遊ばれたりするのが一番いやです。一年生ぐらいの時に、クラスの男の子に「キムチ」と何回も言われて泣き出したことがありました。あわててあやまった子もあつたけれど、一人の子はと中でふざけて、残りのみんなもふざけてそのまま帰ってしまいました。(「たのしく交流」：小学生、下線筆者)

最初の作文の中では、日本語がわからない中でかよった保育所で嫌な思いをしたことが多かったと語られている。そして次の作文では、自分の背景にある文化を対象に差別を受けた経験について書かれている。これらの外国にルーツをもつ子どもたちの語りからは、保育機関や教室など身近な環境の中に文化にかかわる差別と偏見が存在していることが読み取れる。さらに他の作文の内容からも、外国にルーツをもつ子どもたちの被差別体験は、彼らの国籍や言語、名前、あるいは育った環境、独自の食文化など、主に外国にルーツをもつ子どもたちの文化的背景がターゲットにされたものであると考えられた。差別は無根拠に成立するものであるといわれるが²⁵⁾、被差別状況について語られていた 53 編の作文の内容からも、多数派にとっての「自分たちと違う」という事実のみが、排斥の基準になっている現実がみてとれた。多数派である日本人の子どもたちが、無意識のうちに自分たちの国籍や言語、あるいは食文化などの文化を優越するものであると考え、いわゆる日本

人の子どもたちの中でのみ合意が形成されているといえるだろう。このように、外国にルーツをもつ子どもたちが、日本の保育機関や学校などの環境に入り、その環境における適応に課題を抱える背景、あるいは原因として、クラスで共に学ぶ日本人の子どもたちの自文化中心主義に基づく差別があることが指摘されよう。

4. 文化多様性に親しむ実物教材を活用した指導計画

外国にルーツをもつ子どもたちのことばかり、彼らが日本の保育機関や学校という環境に入り、その環境における適応に課題を抱える背景、あるいは原因として、クラスで共に学ぶ日本人の子どもたちの自文化中心主義に基づく差別があることが示唆された。このことは、アメリカにおける「3～4歳までに、自分とは異なる肌の色、言葉などに対して不快や嫌悪や恐れを示し、皮膚の色、着ている服、言語能力ゆえにからかったり、一緒に遊ぶことを拒否したりする」との報告とも符合する。また、保育指針には、「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるよう配慮すること」²⁶⁾、「外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ」²⁷⁾とある。外国にルーツをもつ子どもたちが「母国の文化を周囲から否定的にみられるために、自文化を自由に表現できないままに、自分で抑圧し潜在化させ、しかもそれをネガティブなものとしてとらえやすい」²⁸⁾との指摘から考えあわせても、異文化への対応にかかわる教育的支援を可能とする教材・教具とは、日本人に対しては「自分たちと違う」という事実が排斥の基準にはならないこと、自分たちの国籍や、言語、あるいは食文化などの文化が相手の文化と異なっている、それは優越するものではなくて、対等の価値を有し尊重すべきものであることに気づかせるものが望ましいと考えられる。そこで、本稿では、そのような意識の基盤を築くものとして、文化多様性に親しむ実物教材について検討したい。

具体的には、JICA 横浜海外移住資料館が多文化共生を学ぶことを理念として掲げ開発し、どの保育機関でも借用可能な実物教材である、「いみんトランク」²⁹⁾に着目する。

(1) 指導計画の考え方

幼稚園教育要領解説において、指導計画の作成に当たっては、①発達の見通しや活動の予測に基づいて環境を構成すること、②幼児一人一人の発達を見通して援助することが重要であるとされている³⁰⁾。また、幼児期における教育は環境を通して行うものであることを基本とする。さらに教師自身も環境の一部であり、「物的環境の構成に取り組んでいる教師の姿や同じ仲間の姿があつてこそ、その物的環境への幼児の興味や関心が生み出される」とされる³¹⁾。指導計画には、年間計画、月案という長期的なもの、週案、日案という、短期的なものがある。本節の(3)で検討する活動、「プレートランチでごっこあそび!」は、短期的なものの中でも、その日の保育をどのように展開するのか、1日の子どもの生活時間を見通して細かく立てる指導案である日案に位置づけられるものである。

(2) ハワイ移民の歴史と使用する実物教材の解説

1) ハワイ移民の歴史—多文化共生を考えるきっかけとして—

横浜駐在のハワイ領事ヴァン・リード(Eugene M. Van Reed)は、1868(明治元)年に主にサトウキビ耕地の労働者として、153人の日本人をハワイに送り出した。その後、1885(明治18)年には政府の取り扱いによる移民(官約移民³²⁾)がはじまり、多くの日本人がハワイに移住した。サトウキビ耕地において、過酷な労働を強いられ、パンゴで管理され、「労働監督はポルトガル人かスペイン人で、日本人は皆、汗みどろになって働く肉体労働者」³³⁾だった。昼食のために日本人は弁当缶を使用し、上の段におかず、下の段にご飯を入れて耕地に持参した。耕地に働いていた多様な国からの労働

者とおかずを分け合ったことがきっかけとなり生まれたミックスプレート、あるいはプレートランチは、多文化社会ハワイの象徴ともいえる。

また、現在ハワイには先住の人々、かつてサトウキビ農園で働いた移民の子孫である日系の人々、中国系の人々、韓国系の人々、加えて軍の関係でハワイに移り住んでいるアメリカの人々など多様な人々が暮らしている。そしてそれらの人々が混ざりあいながら家族が構成されている例も少なくない。

2) 実物教材の解説

ここでは、前述の「いみんトランク」に含まれる、ハワイ移民に関連した実物教材である、「ミックスプレート」、「ハナハナウエア」、「サトウキビ」、「弁当缶」、「紙芝居（弁当からミックスプレートへ）」、および「ハワイのビッグファミリーの写真」の解説を行う。5 歳児にとって、日本、ハワイといった空間概念の把握は難しい面もあるが、保育指針には、「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てよう配慮すること」や「外国人など、自分とは異なる文化を持った人に親しみを持つ」ことについて記載がある。保育者の工夫により、できるだけ空間概念の把握を支援することがのぞまれよう。

①ミックスプレート：現在ハワイで実際に食べることができるプレートランチのレプリカ。一皿の上に、ライス、卵焼き、キムチ、ポテトサラダ、チキン、ブルコギなど、多様な国の料理が載っており、文化多様性に親しむ実物教材としての役割が期待される。また、移住者が経験したであろうおかず交換を、ごっこ遊びを通して体験できる。

②ハナハナウエア：日本からハワイに渡った移民がサトウキビ農園で着用した労働着。実際に保育者が着用することが可能である。また、ミックスプレートを活用する際、適切な環境を構成する役割も期待される。

③サトウキビのレプリカ：色、形など、サトウキビの実物そっくりのレプリカ。このレプリカを用いて、ハワイで日本人移民がどのような仕事をしていたのか、わかりやすく教えることができる。また、ミックスプレートを活用する際、ハナハナウエアとともに、適切な環境を構成する役割も期待される。

④弁当缶：実際にハワイ移民が使用していた弁当缶（本物）。ミックスプレートのライスや卵焼きなどを弁当缶に入れることができる。プレートランチと併せて活用することで、弁当缶からプレートランチに移行する過程を遊びながら体験できる。また、ミックスプレートを活用する際、他の実物教材とともに、適切な環境を構成する役割も期待される。

⑤紙芝居（弁当からミックスプレートへ）：100 年以上前のハワイ生活、サトウキビ農園、様々な国からの移民との交流、ハワイの多文化社会、移民の食文化変容を移民史を通して描いている。

⑥ハワイのビッグファミリーの写真：ハワイに実際に存在する、58 人で構成された一つの家族の写真。様々な肌の色、髪の色の人々が映っており、多様な人々が楽しく共生しているイメージが伝わってくる写真である。この写真を通して、文化多様性に親しむことが期待される。

日本人の子どもたちは、ハワイに渡った日本人移民の歴史と経験を知ることを通して、移民、つまり国境を越えて人が移動することを身近にとらえると同時に、外国で暮らすことの大変さを感じることが可能となる。そして、カラフルで視覚的にインパクトがあり、美味しそうなミックスプレートで遊びながら、自分とはちがう文化、食べ物に親しみ、恐れや嫌悪を軽減することが期待される。さらに、多様な人々で構成される家族像（ビッグファミリー）に接することによって、多文化共生のイメージを獲得することが期待されよう。



写真：実物教材「いみんトランク」：上の段左から、弁当缶、ミックスプレート、サトウキビのレプリカ。下の段左から、ハワイのビッグファミリーの写真、紙芝居、ハナハナウエア

(3) 活動「プレートランチでごっこあそび！」

指導計画の作成形式は、定型のものはないといわれているが、応用またはヒントとして、下記のことを言われている³⁴⁾。

- ・教師の発想を豊かにして、環境を整え、手に入る教材の利用方法や活用の仕方、展開への援助などを工夫する。
- ・子どもの姿に合わせた計画に修正していく。
- ・子どもにとって身近な活動を展開することで、子どもが自発的に活動に取り組むことにつながる。
- ・それぞれの地域や国の文化、自然環境などを

できるだけ取り入れ、軸にしながら、指導計画を作成していくことは、魅力ある教育活動につながる。

また、長期の指導案、短期の指導案のどちらにも共通的な留意点として①子どもの発達の理解、②「ねらい」と「内容」の明確化³⁵⁾、③保育環境の構成が挙げられる³⁶⁾。ここでは、これらのことと、5領域である、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」を踏まえながら、「弁当缶やミックスプレートを使って遊ぶ、楽しむ」「自分とはちがう文化、食べ物に親しむ（恐れや嫌悪を感じない）」をねらいとして設定した

活動	プレートランチでごっこあそび！	対象年齢	5歳児
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当缶やミックスプレートを使って遊ぶ、楽しむ ・自分とはちがう文化、食べ物に親しむ（恐れや嫌悪を感じない） 		
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・日本からも多くの人がハワイやブラジルなど海外へ渡っていったことを知る ・いろいろな国の料理が盛り付けられたミックスプレートについて知る ・さまざまな肌の色、髪の色の人々が仲良くしている家族について知る 		
準備	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA 横浜移住資料館から、「ハナハナウエア」「弁当缶」「ミックスプレート」「紙芝居（弁当からミックスプレートへ）」「さとうきびのレプリカ」「ビッグファミリーの写真」を借りる ・「おじいさんのたび」を用意する 		

時間	子どもの姿と環境の構成	教師の援助と留意点
9:00	<p>◇登園する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生や友達と挨拶を交わす <p>◇部屋で所持品の始末をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タオルやコップを出し、連絡帳に出席シールを貼り、かばんと帽子をロッカーにしまう <p>◇好きな遊びをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育室（保育者の真似をしながら、自分なりのミックスプレートを製作、色画用紙のサトウキビを製作、積木、ブロックなど） ・自由に食べ物を作る ・弁当缶に自分で作った食べ物を入れて遊ぶ ・園庭（サッカー、鬼ごっこ、ブランコ、滑り台、ジャングルジム、砂場、鉄棒など） 	<p>◇声をかけながら、子どもの心身の状態を把握する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や子どもに明るく挨拶する <p>◇所持品を出し忘れている子どもには声をかけて気づかせ、自分でやるよう促す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の日付を子どもに分かりやすいように提示しておく <p>◇予め、「ミックスプレート」「弁当缶」「さとうきびのレプリカ」「ビッグファミリーの写真」を大きな机の上に置いておく。レプリカなどで、自由に遊んでいいと伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近くの机に、セロテープとともに、緑の色画用紙で作った、サトウキビの茎と葉を多目に用意しておく ・工作道具、多様な色の色画用紙、マジック、それから保育者が色画用紙で作った、食べ物（ミックスプレートの内容に近いもの）も用意しておく ・保育者は、子どもたちと一緒に、食べ物を製作し、ミックスプレートをういたおかず交換ごっこを楽しむ
10:00	<p>◇片付けをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊んでいた遊具をしまう ・うがい、手洗いをし、排泄をすませる 	<p>◇片付けも自分たちの生活の一部であることを知らせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師も一緒になって、遊具をもとあった所に収めたり、しまったりしながら、片付け方を指導する
10:20	<p>◇集まる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本からも多くの人がハワイなど海外へ渡っていったことを知る ・ハナハナウエア、ミックスプレートなどの実物教材に関心を示す ・農園で働いた人の気持ちを理解する ・いろいろな国の料理が盛り付けられたミックスプレートについて知る ・ビッグファミリーの写真から、人数の多さに気づく ・一つの家族の中にさまざまな肌の色の人がいることに気づく ・一つの家族の中にさまざまな髪の色の人がいることに気づく ・写真に写っている人々の様子について気づく（楽しそう、嬉しそう、仲が良さそう・・・） 	<p>◇椅子を持ってきて半円になって座るように指示する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者はハナハナウエアを着用し、紙芝居を読んで聞かせる ・昔、日本から多くの人がハワイに働きに行ったことを伝える。その際、時間や空間の概念が未発達であることを意識し、支援を心がける ・サトウキビ農園での作業は、とげが痛くて大変であったことを伝える ・「各国のおかずが盛り付けられたミックスプレートはおいしそうですね」と語りかける ・ハワイのビッグファミリーの写真を示す ・ビッグファミリーの人数の多さに気付かせる ・ビッグファミリーの写真を示し、楽しそうな家族の様子に気づかせる。教師も共感的にかかわる。「見かけは違っているけど、ひとつの仲良さ家族ですね」と語りかける。
11:40	<p>◇「いただきます」の挨拶をして、お弁当を食べる</p>	<p>◇当番の子どもを前にだし、「いただきます」の声を掛けさせる</p>
13:30	<p>◇片付ける</p> <p>◇帰りの準備をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・排泄、手洗い、うがいをして、タオルと連絡帳をかばんにしまい、かばんと帽子を身に付けて椅子に座る <p>◇絵本「おじいさんのたび」を読み聞かせる</p>	<p>◇片付けの時間を十分とる</p> <p>◇帰りの支度することを告げる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・排泄、手洗いをすませるよう促す ・タオルや連絡帳をしまい、かばんと帽子を身に付けて椅子に座るよう指示する <p>◇前もって椅子を半円に並べておく</p> <p>◇文化多様性につながる絵本として、「おじいさんのたび」をあらかじめ用意しておく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり、気持ちを込めて読んで聞かせる <p>◇明日に期待がもてるような言葉をかけて終わるようにする</p>
13:50	<p>◇帰りの挨拶をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで元気に、「さようなら」の挨拶をする 	
14:00	<p>◇降園する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・呼ばれたグループ順に帰る 	<p>◇保護者を確認して子どもを帰すと共に、伝達事項のある保護者には伝え忘れないように気をつける</p>

活動、「プレートランチでごっこあそび！」(日案)について論考する³⁷⁾。なお、下線部分は、ねらいや内容に深くかかわる箇所である。

幼児教育には、遊びの要素が不可欠である。教師も一緒に遊び、環境の一部になることを心がけたい。また、アメリカに渡った日本人移民を祖父にもつアレン・セイの作品である『おじいさんのたび』³⁸⁾という絵本は、優しい風合いの絵に、文字数の少ない文章とわかりやすい言葉で日本からアメリカに渡った移民の心情を伝える内容となっている。是非、用意したい。

(4) 保育者の姿勢

萩原は保育者の課題として、「マジョリティの日本人の幼児がマイノリティの外国籍幼児の目や髪の色、言葉、生活環境や行動の違いに関心を寄せ、受容し、理解し、援助するだけでなく、日本人の幼児、外国籍の幼児を問わず、その違いを尊重する心情を育て、自他の違いを調整していくアコモデーション能力を育成してゆくことにあろう」³⁹⁾と述べているが、前節で提示した指導計画を実施するうえで欠かせない要件として、保育者の姿勢が挙げられよう。つまり、保育者が「自分の文化を伝えることにこだわることをやめ、文化的な違いに敏感になる」⁴⁰⁾、「どんな理由があるにせよ、性の違い、人種、民族の違い、また身体的障害の有無によって他の子どもを拒否すること、また他の子どもの自己認識(アイデンティティ)に対し侮辱的な言葉を用いることをしない」⁴¹⁾といった、異なる文化を尊重する意識を持つことは、重要なことである。

ボニー・ノイゲバウエル(Bonnie Neugebauer)は、「子どもはまた、このような人々に大人がどう対応するかを観察し、そこから情報を得ます。もし私たちがそのような人に対し、不快な感情を示したり、無視したりした場合は違いをもった人間には何か悪いことがあると結論づけてしまいます」⁴²⁾と述べているが、このことは、保

育者の幼児に及ぼす影響を端的に表していると言えるだろう。以下のような幼稚園教育要領にかかわり指摘されている内容とも通じるものと考えられる。

一人一人に応じるということは、一人一人が過ごしてきた生活を受容し、それに応じるということなのである。それにはまず、幼児の思い、気持ちを受け止め、幼児が周囲の環境をどう受け止めているのかを理解すること、すなわち、幼児の内面を理解しようとするところから始まるのである。そして、その幼児が真に求めていることに即して必要な経験を得られるように援助していくのである。このことは、幼児一人一人をかけがえのない存在として見、それぞれ独自の生き方(行動の仕方、表現の仕方など)をしていると考え、その独自性を大切にすることなのである⁴³⁾。

保育者自身が、異なる文化を相対的にとらえる視点を持ち、「自分たちと違う」という事実が排斥の基準にはならないこと、自分たちの国籍や言語、あるいは食文化などの文化が相手の文化と異なっている、それは優越するものではなくて、対等の価値を有し尊重すべきものであることを認識してはじめて、子どもたちにそれを伝えることが可能となる。

5. おわりに

本稿では、日本においても異文化への対応にかかわる教育的支援を、乳幼児期という人間形成の早い時期からはじめることの重要性が指摘されていることを受け、文化多様性に親しむ実物教材を活用して、「弁当缶やミックスプレートを使って遊ぶ、楽しむ」、「自分とはちがう文化、食べ物に親しむ(恐れや嫌悪を感じない)」をねらいとして設定した、具体的な指導計画について検討を行った。

外国にルーツをもつ子どもたちの語りからは、幼児の異文化をめぐる状況において、身近

な環境の中に文化にかかわる差別と偏見が存在していることが読み取れ、彼らの異文化適応に外的要因が関与している可能性が示唆された。したがって異文化への対応にかかわる教育的支援を可能とする教材・教具とは、日本人の子どもたちに対しては「自分たちと違う」という事実が排斥の基準にはならないこと、自分たちの国籍や、言語、あるいは食文化などの文化が相手の文化と異なっている、それは優越するものではなくて、対等の価値を有し尊重すべきものであることを習得させるものであると考えられた。そして、そのような意識の基盤を築くものとして、文化多様性に親しむことが重要であると考えられた。

本稿で提示した活動、「プレートランチでっこあそび!」は、その内容に「日本からも多くの人がハワイやブラジルなど海外へ渡っていったことを知る」「いろいろな国の料理が盛り付けられたミックスプレートについて知る」「さまざまな肌の色、髪の色の人々が仲良くしている家族について知る」を含む。この活動は、様々な食べ物が盛り付けられたミックスプレートから感じ取ることができる「美味しそう」という肯定的な印象や、日系人を含む多様な人々で構成された大家族の楽しそうな様子から、文化多様性に親しむことを意図したものであり、異文化への対応にかかわる教育的支援と捉えられよう。

この活動に関しては、環境の構成、教師の援助を含め、実践を通して検証することが今後の課題である。しかしながら、幼児期という可塑性が高い時期に、保育者が異文化への対応にかかわる教材・教具を用い、教育的支援を意識的行うことには一定の意味があり、外国にルーツをもつ子どもたち、日本人の子どもたちの両者にとって資することが期待される。また、本稿においては、グローバル時代の幼児教育に求められる教材・教具として文化多様性に親しむ実物教材に着目したが、今後様々な視点から、異文化への対応にかかわる教育的支援に活用可能

な教材・教具について検討されることが求められよう。

- 1) 0~5 歳までの在留外国人数は、86,784 名である (男性 :44,620 名、女性 :42,164 名)。政府統計の総合窓口「国籍・地域別 年齢・男女別 総在留外国人 (2013 年 6 月 30 日公表)」の表から筆者計算。
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111233> (2013 年 8 月 6 日取得)
- 2) 社会福祉法人日本保育協会:「保育の国際化に関する調査研究報告 -平成 20 年度-」2009、pp.7-8。幼稚園については、渋谷が、文部科学省が全国的な動向の詳細な把握を行っていないとしつつも、1999 年に外国人在園者数が 3,651 人であると記述している。「乳幼児をとりまく多文化的状況」山田千明編著『多文化に生きる子どもたち -乳幼児期からの異文化間教育-』明石書店、2006、p.21。
- 3) 松尾知明:「乳幼児期からの異文化間教育とは」山田千明編著『多文化に生きる子どもたち -乳幼児期からの異文化間教育-』明石書店、2006、pp.188-193。
- 4) 藤巻秀樹:「『移民列島』ニッポン -多文化共生社会に生きる」藤原書店、2012、pp.197-201。
- 5) 山田千明:「乳幼児期における多様性尊重の教育 -アンチバイアス教育を手がかりとして」山田千明編著『多文化に生きる子どもたち -乳幼児期からの異文化間教育-』明石書店、2006、pp.107-108。この部分は、ダーマン・スパークスの調査結果から導き出されたものであるが、日本においても、外国人保護者のもっとも気がかりなことはいじめであるとの報告がある。2001 年 10 月 23 日付朝日新聞、「保育園は多文化社会」より。
- 6) 山田千明、同上、pp.115-123。

- 7) 大沢裕:「幼児教育の教材とは」日本教材学会『日本教材学会設立 20 周年記念論文集『教材学』現状と展望 (下巻)』共同出版株式会社、2008、pp.453。
- 8) 廿日出里見:「保育所における異文化間の友だち関係の微視的分析」日本保育学会『保育学研究』第 37 巻第 1 号、1999、pp.43-50。
- 9) 爾寛明:「異文化理解とアイデンティティ形成の交差関係 - 保育行事の中の文化性の役割 -」日本保育学会『保育学研究』第 37 巻第 1 号、1999、pp.51-58。
- 10) 松尾知明、前掲書、2006、pp.193-203。
- 11) 三井真紀:「幼稚園教育要領及び保育所保育指針に見られる多文化的視点 - 保育現場における園環境、指導法の事例分析から -」日本比較文化学会『比較文化研究』No.77、日本比較文化学会、2007、pp.51-58。
- 12) 管田貴子:「多文化教育の独自性についての一考察 - 幼児期に取り組む意義を探る -」富山大学生涯学習教育研究センター『富山大学生涯学習教育研究センター年報』第 5 巻、2003、pp.11-19。
- 13) 平野知見:「多文化時代の幼児教育の課題 - 「偏見」と「平和」をキーワードに -」常磐会学園大学『研究紀要』第 7 号、2007、pp.85-91。
- 14) 中内敏夫著:「教材と教具の理論」有斐閣、1978、p.14。
- 15) 小野慶太郎著:「人間形成における教材選択の視点」東洋館出版、1982、p.5。
- 16) 山口満:「教材とは」日本教材学会『日本教材学会設立 20 周年記念論文集『教材学』現状と展望 (上巻)』共同出版株式会社、2008、p.22。
- 17) 山口満、同上、p.24。
- 18) 大沢裕、前掲書、p.448。
- 19) 平成 20 年 4 月に厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課より出されている、保育指針解説書より。http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf 2013 年 9 月 30 日取得。
- 20) 保育指針解説書、同上、pp.25-47。「乳幼児期の発達特性」と「発達過程」より。
- 21) 谷田貝公昭、高橋弥生:「幼児教育の教材を考えるための一考察」日本教材学会『日本教材学会設立 20 周年記念論文集『教材学』現状と展望 (上巻)』共同出版株式会社、2008、p.363。
- 22) 外国にルーツをもつ子どもたちの語りを扱った研究は少ないが、太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院、2000 など、一部に子どもたちの語りを生かしている研究もある。
- 23) 開催趣旨 (一部抜粋)
「国際化」と言われて久しい日本社会で今、多くの日本の学校でさまざまな背景とそれぞれの固有の文化をもつ子どもたちが、日本人の子どもたちといっしょに学校生活を送っています。しかし、この子どもたちを迎える日本の社会と学校は、このような多様な価値観をもつ人々と真の意味で共生する経験を十分に積み重ねてはいません。子どもたちは、異なるものを排除しようとする意識を感じ、本当の自分を出せずに、悩み苦しんでいます。この子どもたちの思いを受けとめることで、日本の社会や学校がさまざまな違いを理解し、多文化共生社会をめざすことを願ってこの事業を開催します。
- 24) S.B. メリアム著・堀薫夫他訳:「質的調査法入門 - 教育における調査とケース・スタディ」ミネルヴァ書房、2004、pp.164-197。また、作文集のような二次的データをめぐる評価については、「新たな意味生成をはらむ、新たなテキスト」としての捉え直しもなされている。例えば松島は、「引用」という語をネガティブに捉えてはならず、読むという行為に

- よって引き起こされるダイナミクスこそテキスト論の本質といえ、「既成の素材を扱った研究」といった批判は、テキスト分析への無理解からくるものであると指摘している。また、テキスト論において、表現物は表現者が表現を行ったその瞬間において<新たな意味生成をはらむ、新たなテキスト>が誕生したと考えらるべきであると述べている。そして、あらゆるテキストは、それ自体においてすでに意味生成の担い手であり、「語りはじめる」データとして捉えるべきであると指摘している。松島恵介「テキスト分析」やまだようこ編『質的心理学の方法』新曜社、2007、p.163、pp.174-175。
- 25) アルベール・メンミ：『差別の構造』合同出版、1971、p.226。メンミによれば、「差別主義とは、現実上の、あるいは架空の差異に普遍的、決定的な価値づけをすることであり、この価値づけは、告発者が己の特権や攻撃を正当化するために、被害者の犠牲をも顧みず己の利益を目的として行うものである」。
- 26) 保育指針、保育に関わる全般的な配慮事項のオ、p.100。
- 27) 同上、p.73。
- 28) 佐藤郡衛：「在日外国人児童・生徒の異文化適応とその教育」江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、1998、p.486。
- 29) JICA 横浜海外移住資料館の学習キット「いみんトランク」。「いみん」は、移民と International migration、Multicultural Co-living、Interesting、Network (国際的な人の移動、多文化共生、楽しい、日本と世界をつなげる!) の頭文字の双方の意味を含む。教材数は、移民カルタ、4 種類の紙芝居、移民の農作業着、ミックスプレート、教師用の解説書など 50 点以上にのぼる。詳細は、JICA 横浜海外移住資料館の HP を参照のこと (<http://www.jomm.jp/education/imin.html>)。
- 30) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008、pp.192-193。
- 31) 文部科学省、同上、pp.23-29。
- 32) 官約移民は明治 18 年から計 26 回行われ、約 3 万人が渡航した。
- 33) 多文化社会米国理解教育研究会：『移民を授業する - 日系アメリカ人学習活動の手引き -』2007、p.5。全米日系人博物館 HP より。
- 34) お茶の水女子大学子ども発達教育センター：『幼児教育ハンドブック』の「3. 年間指導計画・月案・週案・日案の作り方」より。http://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/report/hand_J/2_3.pdf (2013 年 8 月 20 日取得)
- 35) 「ねらい」とは、幼稚園の教育機関を通して身につけていくことが望まれる、心情・意欲・態度であり、「内容」とは、ねらいを達成していくために指導していく事柄で、具体的な活動は勿論のこと、活動を通して体験される、達成感や成就感、満足感や充実感、などといった内面的なことも含まれる。お茶の水女子大学子ども発達教育センター、同上、p.54。
- 36) お茶の水女子大学子ども発達教育センター、同上、pp.54-55。
- 37) 日案の作成にあたっては、前掲の『幼児教育ハンドブック』を参照した。
- 38) アレン・セイ著、アレン・セイ・大島英美訳：『おじいさんの旅』ほるぷ出版、2008。
- 39) 萩原元昭：『多文化保育論』学文社、2008、pp.34-35。
- 40) J. ゴンザレス・メーナ著、植田都・日浦直美訳：『多文化共生社会の保育者 - ぶつかってもだいじょうぶ -』北大路書房、2004、p.94。

- 41) ボニー・ノイゲバウエル著、谷口正子・
齊藤法子訳：『幼児のための多文化理解
教育』明石書店、1997、p.33。
- 42) ボニー・ノイゲバウエル著、谷口正子・
齊藤法子訳、同上、pp.39-40。
- 43) 文部科学省、前掲書、pp.36-37。